

研究ノート

中国の農民詩人張聯とその詩

山本 由紀子

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・准教授

The Chinese poet Zhang Lian and his poems.

Yukiko Yamamoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

1. はじめに

10年ほど前に中国の学者で文学にも造詣が深いある知人から譲り受けた詩集が、今も手元にある。張聯という、当時無名であった中国の農民詩人が自費出版したものだ。とても上質とは言えない装本で、開いてみると、新聞紙に近い質のざら紙に印刷された文字がところどころ擦れたり滲んだりしているうえ、裏写りの程度が甚だしいところは判読が困難なほどである。おそらく作者自らが誤字を鉛筆で修正したと見られる箇所も随所に見られ、出版費用を極限まで抑えなければならなかった事情が十分に伝わってくる。

無理をしてでも世に送り出したかった詩人の思いや情熱が詰まった詩集が、はるばる海を渡り筆者のところにやってきたことに縁のようなものを感じつつ、早速数編の詩を読んだ。素朴で温かくも、輝きと濃厚な色彩を発するような詩の世界にあつという間に引きこまれてしまった。そして、自身の貧弱な中国現代文学観が覆されるような感覚と同時に、今後広がりゆくであろう文学経験に期待感のようなものも覚えた。この本を譲ってくれた知人もその魅力にとりつかれた一人で、まずはこの装本の粗末さを見よ、詩を読めばわかるだろうが中国にこんな詩も詩

人も他にない、非常に素晴らしくまた独特なものだから、是非日本の読者に紹介するようにと翻訳を勧めてくれたのだった。それでまずは詩集のなかから数十篇を選んで訳してみ、文芸誌上にそのうちの12篇を発表したが、結局それきりになっていた。歳月を経てもずっと気になってしかたがないこの詩人とその作品を、今後も紹介していきたいと思っている。

ところで、筆者はこれまでに中国現代文学研究者との翻訳の仕事にも携わってきたが、その一方で、研究者としての目ではなく日本人読者として興味を引かれた台湾、香港、中国、マレーシア人作家による当代華語文学作品（小説やエッセイ、詩）を選び、翻訳することも細々と続けてきた。ここで紹介するのは詩だが、中国現代詩については関心を持つ日本の研究者は決して多いとは言えない状況で、またそうした研究者たちも「同時代詩人たちをほとんどフォローすることができていない」¹⁾と感じているという。それには、同時代作家・詩人の作品は評価が定まらないゆえ扱いにくいという一般的理由もあろう。だがそれだけでなく、中国の詩人・作品と一口に言っても実際には多様なはずであるにもかかわらず、翻訳の対象として選ばれる詩人・作品には一定の傾向があるように思われる。中国文学の翻訳は主に中国文学研究者

によってなされているのだが、中国の近現代詩研究は政治的事件や時代性、歴史性との関わりから行われるのが主流であるため（もちろんどのような文学作品も、時代性を全く無視して研究することはできないだろうが）、選ばれる作家・詩人も作品も、やはり上述のような基準から研究資料として価値が認められるものが優先されることが多いのではないだろうか。同じ外国語文学翻訳でも書店の書棚にぎわす英米文学の翻訳と比べ、鑑賞の対象として紹介されるものの割合はずいぶん低いという印象、つまり一般の読者のものとなっていないという印象を受ける所以はここにあるのではないだろうかと思われる。

研究者が注目していない作品を翻訳し、紹介できることは、筆者のように中国文学研究を専門としない者の有利な点と言えるかもしれない。本稿では、張聯のこれまでの創作活動や中国国内における評価、詩の特徴について整理するとともに、数編の訳詩を紹介するが、ここで張聯とその作品を紹介することが、現在の中国現代文学の多様性を伝えることにもなれば幸いである。

2. 張聯の創作活動と中国文学界における評価

張聯の創作活動の開始から第一詩集『傍晚集』の出版にいたるまでについては、孫文涛の詩人インタビュー集『大地訪詩人』²⁾に詳しいので、それを参照し、詩集のあとがきに見られる詩人自身の記述とも照らし合わせつつ整理するが、それ以後の動向については、近年注目を集めはじめた詩人ゆえ、まとまった資料はおそらくまだない。たとえあっても入手が困難なため、ここではインターネット上のより信頼しうる情報元を選び、動向を伝える情報を拾っていく。

張聯 (Zhang Lian、ジャン・リエン) は1967年に寧夏回族自治区東部、塩池県の農村、小陽溝村に生まれた。1984年に中学を卒業すると、農村で羊の放牧の仕事に就き、郷営の文化センターで文学書を借りてきては太陽の下で

読みふける生活を4年続けた。詩歌の創作はこのころに始めたという。1988年から1993年の5年間は県内の小学校で代用教員を務めたが、その間は月8元のクラス担任手当てで『詩刊』、『名作欣賞』、『中編小説選刊』といった文学雑誌を購読し、辞書類も入手して詩作を続けた。93年、教員を辞めて地元の村に戻り、向日葵と芋の栽培で生計を立てるようになる。農業での3,000元（当時のレートで約45,000円程度）ほどの年収では家族を養い生活するのが精一杯で、本を買う経済的余裕すらなくなったという。ノートを買うお金にも窮し、かつての教え子が使い古した宿題ノートや雑誌の裏を使って詩を書き、それを綴じては千編を超える詩を書き溜めていったというエピソードも見られる³⁾。

詩の発表は代用教員時代の1990年に開始し、専業の農民となって以後の2000年に省の民刊詩雑誌『原音在線』、塩池県の『方向』に作品が掲載された。孫文涛の目に留まったのはこの『方向』に掲載された作品であったという。孫は2001年に自らが北京で編集に携わっていた詩雑誌『詩前沿』上で「新自然主義鄉村詩」として張聯の作品を紹介した⁴⁾。その前年の2000年に、張聯は友人から2,000元を借金し、最初の詩集『傍晚集』を上梓している。とはいえ、無名詩人の自費出版詩集である。一般の販路にのるようなものではない。張聯はこの詩集を携え、家々の門を叩いて売り歩いたと伝える記事もある⁵⁾。

張聯は、2003年に四川省の大型民刊雑誌『独立』の「民間詩歌精神賞」を受賞した。これは民間の文学界で認められたことを意味するといえよう。それ以後、『中間代詩全集』（海峡文芸出版社、2004年）、『中国当代詩庫』（中国文聯出版社、2007年）、『中国詩典1978-2008』（時代文芸出版社、2009年）、『2012中国最佳詩歌』（江寧人民出版社、2013年）など大型の詩選集に作品が収録されるなど、その作品は地方のみならず、中央の詩壇でも次第に注目を浴び、評価されるようになった。2008年には中国作家

協会の会員となり、全国区の詩人の仲間入りを果たす。そして、2010年には、中国作家協会の『詩刊』と四川省作家協会の『星星詩刊』が共同で発表した「第一回全国十大農民詩人」の一人に選ばれた⁶⁾。作品の発表を始めてから20年、第一詩集『傍晚集』出版から10年でのことである。地方の一農民である張聯の詩が着々と高い関心および評価を得たのはなぜか。その詩が優れていることは間違いない。だが、農民文学自体や張聯の詩風が注目される土台としての、2000年以後の中国社会や文学界の状況といった背景にも注目すべきものがあるのだろう。ここでは詳しく探ることをしないが、とにかく、筆者が初めて作品に触れたころには無名とっていい一農民詩人であった張聯は、翻訳を中断し放置していた10年の間に、押しも押されぬ現代を代表する農民詩人の一人となっていたわけである。

『傍晚集』以後の出版については、第2冊目の『傍晚的詩』(中国文学芸術出版社、2001年)のほか、第6回(2010-2013年)魯迅文学賞の詩歌部門の候補として寧夏作家協会から推薦を受けた『張聯詩精選』(漓江出版社、2012年)が確認できる。また、インターネット上の各種記事の情報によれば詩集数冊のほか、エッセイ集も出版しているようではあるが、目下のところ確認ができていものは数冊のみである⁷⁾。

なお、現在張聯はもはや農民ではないようだ。子どもたちの教育のため故郷の小陽溝村を離れ、塩池県の県城(県政府が置かれる町)に転居したという⁸⁾。「農民作家」である彼にとって、この変化は相当大きな意味を持つと思われるが、今後の詩作にどのように影響するだろうか。孫文涛も上掲のインタビュー集の中で、「村には文化的情報はなかなか届かないであろうし、交流できる読み物にも乏しい状況であろう——だが、これは彼に困難をもたらしてはいるが、それ以上に救いであるとも言えよう(90年代の都市詩人にとって致命的天敵は交錯、過度の交流であり、そのなかで彼らは自分を見失ってしまうのである)」としている。今も地方に居住し、

豊かとはいえない生活を送っているという点では変化はないようだが、少なくとも「農民詩人」として創作を行い評価を得た彼が農民の身分を離れたことは、その創作活動に何らかの影響をもたらさずにはいないだろう。

3. 張聯の詩について

張聯の詩が最初に日本で紹介されたのは、2002年のことである。『藍』(総第7・8期合併号、藍・BLUE文学会、2002年)誌上で『傍晚集』から5首が原文のまま掲載された。すべて「傍晚」、日本語にすれば「夕暮れ」という題名の詩である。実は、『傍晚集(夕暮れ集)』に収録されている全96首すべてに「傍晚」というタイトルが付けられている。このことについて張聯は、90年代の10年間に創作した作品群から「96の“夕暮れ”を取り出した」⁹⁾選集なのだと説明している。日本語訳での最初の紹介もやはり『藍』(総第13期、2004年)誌上で、拙訳で12首が掲載されたのだが、これらには後に示すとおり、「夕暮れ」ではなくそれぞれ異なる題名が付されている。これは底本とした『傍晚的詩(夕暮れの詩)』(中国文学芸術出版社、2001年)¹⁰⁾の記載に拠ったものだが、本詩集においては各詩に詩中の一節がタイトルとして付されている。

張聯がなぜ夕暮れの詩ばかり歌うのかについては、『傍晚的詩』のあとがきに以下の6つの理由が示されている。これらからは、夕景や夕刻が詩人にとって寧静をもたらし、創作意欲をかきたて、さらには自然と人間の関わりについての思考を促すものであることが分かる。

- 一、一日の農作業が終わるころに、ようやく生活や生命、自然、環境について考えるひとときを持つことができる。
- 二、夕焼けが好きだから。天地が輝きわたり、安らぎと温かみに包まれる。色彩に対して私が敏感なこともある。
- 三、暮色が好きだから。ほんのりとした薄暗さが西の空から迫り、天空を羽ばた

く翼のごとく一日の音を静める。それが人に寧静をもたらし、思索へと導くのだ。

四、夕陽の丸さが好きだから。このとき時間はひときわ冴えて目にも明かなものとなり、心が静寂で満たされる。

五、孤独が、夕陽の孤独が好きだから。この美しさのなかで、夕陽が静かなる夢を完成させるのだ。

六、夕暮れは、西の空にある大自然への静かな入口だと思う。夕陽やその周りの彩雲からなる小さな入口である。この入口で、人と自然がもっともよく触れ合い、溶け合うのだ。

孫のインタビュー集においては、さらに以下の2つの理由が付け加えられている。

七、夕暮れは、個人の象徴であり、自然の符号であり、天籟だと思う。また不変であり、呼びかけであり、静かに待つ姿でもあろう。

八、夕暮れは、生命の感情、生命の体験であり、母なるテーマであり、自己表現である。ほぐされた情緒であり、文字通りの夕暮れではなく、私のふるさとであり…。

張聯の詩には、いずれも14行詩（ソネット）であるという形式上の特徴もある。ただし、無韻律のソネットである。張聯はこの詩形をとることについても上掲のあとがきで触れ、「一編の詩は一幅の絵であり、境地であり、童話であり、物語である。詩集のいずれの詩もはじまりであって、終わりでもあり、合わせればひとつの有機的な統一体となるのだ」という詩観とともに、「14行への偏愛ゆえに、14行に整えている。新しいソネットを作り出したいという思いもある」と語っている。

詩に使われている言葉についても一つの興味深い特徴が指摘されている。それは、方言を用

いているということである。広大な国土と十数億の人口を抱える中国では標準語の普及が日本ほど徹底しておらず、大方言以外にも、各省や県で使用される方言など、非常に多彩な方言が使用されている。地方の農村で生まれ育ち、故郷から出ることがなかったことを考えれば、張聯の詩の言葉に無意識のうちに多少の方言が混じることはごく自然なことと思われる。だが、言葉を注意深く、効果的に使い分けるのが詩人である。ときには意図的に方言を用いることもあるのではないかと想像する。そのような張聯の言葉について、著名な詩人であり彼を取材したこともある王小妮は以下のように述べている。

彼は「大地（日本語と同じく大地の意）」を「坟（普通話で墳、墓の意）」と呼び、「傍晚（夕暮れ）」を「喇叭（ラッパ）」と、そして「猪（ブタ）」を「猪儿」と呼ぶ。これらの言葉の多くは当地の方言なのだが、張聯のフィルターを通せば、詩の言語に変わるのだ¹¹⁾。

実は、筆者が翻訳に取り組むなかで、自らの貧弱な中国語力ではこのこと、つまり、方言が使用されていることに気付くことができなかった。ただ、どうしても言葉の意味が詩の中でうまく馴染まなくて頭を抱える経験を何度かしたことは、記憶に鮮明に残っている。王の挙げた「坟」もその一つである。王の言う「張聯のフィルター」とは、張聯の詩風、詩の世界そのものを指すのであろうから、張聯の詩を他言語に訳すことでその持ち味を完全に損なうことはないだろう。だが、中国語と日本語という言語の壁を越えるという翻訳一般の持つ困難に加え、方言という障壁まで存在することは、翻訳者には悩ましい。翻訳の対象が短い言葉によって構築される文学である詩で、さらに、方言の使用がその詩の味わいにおいて一定の効果を担っているとなれば、その壁はなお高く、越え難いものである。日本語も、国土は小さいながら地形の複雑さゆえ方言は多彩で、翻訳に方言を交えるこ

と自体は可能だ。だからといって、日本の内陸の農村の方言のなかから任意に一種を選んで訳語に当てたとしても、同様の詩風が再現できるとは想像しがたい。方言の訳出については、最初から諦めるしかないのかもしれない。

形の上で捉えやすい以上のような特徴を有する張聯の詩を最初に全国に向けて紹介した孫文涛は、『大地訪詩人』の張聯について記述した章において、「現代自然主義郷村詩人」という表現をタイトルに用いている。また、2003年にいち早く張聯の作品を評価し授賞した『独立』誌は、『新現代郷村詩歌』という言葉で張聯の作品を紹介している。この「現代」や「新」という語の使用から、まずは張聯の詩が従来の農民詩とは異なるものであるという評価がなされていることが分かる。孫は「彼の詩は文化を身に付けた新しい農民が描く農村の絵である」と述べているが、その“新しさ”とは、農民詩の持つ郷土性に、現代性や鍛錬による創作技巧が加わったことを指している。

また、中国では近年、「打工詩人（出稼ぎ詩人）」と呼ばれる、地方から都市部へ出稼ぎに出た人たちが、流浪の心境や望郷の念、生活苦などをうたう詩も注目されている。先述の「十大農民詩人」に選ばれた詩人の多くも、実は農村と都市の間を往来する出稼ぎ詩人である。それに対し張聯は、現在こそ農村を離れてはいるが、農業のみを生業としながら創作活動を行い、作品を発表していたという点で、10名のなかにおいて異色である。張聯ももちろん農民として経済的困窮を極める生活を送ってきたが、その詩は「絵」と表現される類のものであり、出稼ぎ詩人の詩風とは一線を画すものである。張聯が農民詩の新しい世界を切り開いたことは、短期間で高い評価を獲得した理由の一つなのではないだろうか。

彼は西北部の砂漠の端の、長城の足下に広がる向日葵や村落、雲、石炭車、ほこり、妻子、夕飯、かまど、これらすべてを黄金色の絢爛な色彩で描き出している。まるで

一幅の油絵のように、きらきらと輝いているのだ。そう、彼の短い詩は、荒削りさはあるが、色彩に満ちた、そして偽りの一切ない農村の近景を、非常に巧みに昇華させているのだ。が、決して文人の筆による美ではなく、農民の目に映る美によってである。わざとらしさも、虚飾も、歪曲もない。これは彼自身農民だからである。

この孫文涛（上掲）の評価は、まさに筆者自身が抱いた感覚と一致する。輝くような色彩を放つ農村の夕景や彼の心持ちを映し出す情景を、農民ならではの視点と現代人に共通の感覚をもって一幅の「油絵」に仕上げているのだ。「油絵」を思わせる濃厚な印象は、テーマがいずれも黄金の光に包まれる夕暮れ時の情景であること、色彩の描写が豊かなことに起因するのかもしれない。

4. 訳詩の紹介

最後に、『傍晚的詩』収録の詩7編の訳詩を紹介する。これらはいずれも『藍』に発表した拙訳をもとに、表記や表現に多少修正を加えたものである。題名については、第二詩集『傍晚的詩』で付されていたものを（ ）に入れて示す形をとったが、先述のとおり、先に出版された『傍晚集』ではこれらすべての詩が「傍晚（夕暮れ）」と題されている。

作品紹介の前に、詩人やその詩、そして評価についてあれこれ述べてしまっただが、それでもひととき張聯の夕暮れの詩の世界に浸ることができるのではないかと思う。今後も、張聯の詩の翻訳や紹介を継続していきたいと考えている。

訳詩 7 編

夕暮れ（トリマキなんて名がある）

こんな夕暮れ

羊の群れがほくをとりまき山々がほくをとりまき野原がほくをとりまく
だからトリマキなんて名があるんだろうと思った

こんな夕暮れ

夕陽がほくをとりまき月がほくをとりまき蛾の群れがほくをとりまく
あらゆるとりまくトリマキがほくをとりまく
ほくは息を詰まらせながらほくをとりまくかぐわしい匂いを吸い込んで
だからトリマキなんて名があるんだろうと思った
窒息しそうな 霧^{うき}囲^き気の外にある空を見ていると
無数の瞬きするものたちが降りてくるのが見える
こんな夕暮れにほくは小部屋に逃げ込み
空っぽに響きわたる音にはとした
部屋には妻のとりまきがないから
夜はもう窓台に座し月の光で沐浴している

夕暮れ（西の空にあるおまえの入口で）

西の空にあるおまえの入り口のあの山のふもと
あの野草が生い茂ったところにほくの畑がある
日暮れまでわき目もふらず猛烈に耕し
ようやくおまえを背にして村へと歩きはじめた
無言のままにとほとほと
西の空いっぱい夕焼けを両肩に負うのだけを感じながら
村の入り口へと向かう
養蜂場を過ぎ家路につく羊の群れを追い越して
隣家を通り過ぎて家に着いた
その日の夕焼けを軒先にひっかけると
家路の沈黙を家のなかに持ち込んだ
紐をひっぱり部屋の灯りをつけると
ほくはなぜか孤独の面持ちで
窓の外の情緒をじっと見つめた

夕暮れ（ちかちか光るかまどの火）

日が落ちるころに牧場からもどると
妻は豚にえさをやりに出た
かまどの火を見ていてね
もうすぐごはんが炊けるから重湯をすくっておいてと言付けて¹²⁾
ちかちか光るかまどの火に壁は夕暮れ色に染まっている
ほくは かまどのそばで薪をくべ
飯が炊けたら重湯を捨てようとしゃがんで待っていた
疲れが次第にからだから抜けてきたころ
背後の戸口に妻らしき気配を感じた
ふりかえるとそれは本を借りにきた村の若者だった
眠る前に幾ページかめくればよく眠れるのだという
本棚のところから下りてくると
妻はもう入り口の灯りをともしていた
灯りの下を若者が帰っていくと ほくはようやく重湯をすくうことを思い出した

夕暮れ（ほくの気持の生長を止めるため）

夕やみのなかほくはひまわり畑で葉っぱの響きを聞いていた
これは海の調べだ
多頭ひまわりの出現を期してほくは歩きまわる
ひまわりの燦々と香る花のなかを
歩きまわるうちに見たのはそれぞれのひまわりの背後にさっと現れ
集まっては消えていくとてつもなく大きな静寂だけ
それはほくの体中に絡みついて染みこみ
すばやくほくの心とからだにある感情を生長させた
孤独である
ほくは前へ前へと歩き休まず歩きつづけ
多頭ひまわりの出現を追い求めた
海の調べのなか
ほくの気持ちの
生長を止めるため

夕暮れ（太陽が山辺に落ちて静まりゆく）

火のようにあかい太陽が
山辺に落ちて静まりゆく
庭に柔らかな安らぎが漂う
犬の黄色は静まりかえる
待ち構える狼の如く伏し
足音を拾いそばだてる耳
薄目で影を横睨みする目
火のようにあかい太陽が
山辺に落ちて静まりゆく
桃の木蔭を抜けくる微風
温もりに寄添う庭の椅子
夏の夕暮れが詩的に訪れ
斯く一日の労働は浄化し
疲労が家中に満ちわたる

夕暮れ（アブラナ畑を横切って）

淡くかすかな雲 悠々たる風 ほの暗い暮色
ぼくは西の空の下でひまわり畑の鋤入れをしている 村からは三、四里
帰りゆく羊たちが移動している 音がした
思わずふりかえると 羊たちはすでに遠く
静けさが広々としたなかを響きわたっていた
彼方の空がひとところ 赤みをおびている
ぼくは妻と家路についた アブラナ畑を横切って
驚いた白い蝶が黄色い花から飛び上がる
牧場を歩けば 牧草がさやさやと揺れる
東の空には真っ白の満月
淡雲が しだいにほんのりと赤みをおびてきた
家に着くと もう夕飯の支度に忙しい
子どもらは待ちかねて居眠りし
静けさが中庭に響きわたっている

夕暮れ（ほくが夕暮れをうたうのは）

ほくが夕暮れをうたうのは
 夕暮れになれば
 さわやかな北風が吹くからか
 つばめが低空を旋回しながら飛ぶからか
 緑ともいえぬ淡い色あいの草の陰があるからか
 黒くて小さいカブトムシがカサコソと這い歩くからか
 それとも
 家路につく羊の群れと歩きながら
 この初夏の村はずれで
 もう青くない空と
 淡い筋雲が音を立てて揺らめくの見上げ
 夕暮れが
 翼を羽ばたかせて渡るように
 夜をすつぱり覆うのを見るからか

注

- 1) 三木直大「中国現代詩研究の現在」『アジア社会文化研究』第12号、2011年、119-122頁
- 2) 孫文涛（1952-）は詩人、随筆家。2001年から最下層の詩人を訪ねて中国の20余省をめぐり、地方や辺境で長年創作を続ける詩人や農民詩人、出稼ぎ詩人など、中央詩壇では注目されない、埋もれた詩人、主に若手の詩人を訪ねインタビューを行い、『大地訪詩人』（天馬図書有限公司、2003年）として出版した。張聯は2002年3月に塩池県にて訪問を受けている。本稿では、『藍』（総第7・8期合併号、2002年）に転載された「或者说，我是在留住短暫鄉野時光—訪寧夏現代自然主義鄉村詩人張聯（あるいは、農村の一瞬を書きとどめているのかもしれない—寧夏の現代自然主義農村詩人、張聯を訪ねて）」を参照した。
- 3) 孫文涛「再次回到新美的清晨：寧夏農民詩人張聯」（『散文網』、2012年4月6日、URLは注末に記載）のほか、いくつかの雑誌・新聞のインターネット記事に同様の記述が見られる。<http://www.sanwen.net/subject/415553/>（閲覧日：2015年2月27日）
- 4) 注3)の孫の記事に記されている。記事によれば、『詩前沿』では編者の註解に加え、劉鈞による「談原生態鄉土詩和張聯」という文章とともに紹介されたという。
- 5) 「在大山里写字的靈魂——寧夏西海固農民作家群像」（『中国日報網』、2012年11月8日、URLは注末に記載）に、「張聯は一軒一軒見知らぬ人の家のドアを叩いていった。1冊7元の詩集を、全部で350余本売った。」とある。第一詩集の出版費用の工面についてもこの記事で見られる。http://www.chinadaily.com.cn/dfpd/2012-11/08/content_15895734.htm（閲覧日：2015年2月18日）
- 6) 『詩刊』、『星星詩刊』はともに中国詩壇において最も影響力のある刊行物であり、選ばれた意義は大きい。なお、この十大農民詩人に選ばれた10名の多くは省の作家協会会員であり、中国作家協会会員となった者は張聯を措いて他にはいないようだ。十大農民詩人の選出活動が行われるなど農民詩人・作家が注目される潮流があるなかでも、張聯の活躍・評価は際立っているということか。
- 7) その後の詩集出版状況については、注5)に示した記事に、2012年に8冊目の詩集を出版したことが書かれているが、注3)に2012年に『清晨集』を出版したとあり、これのことか。また、「写在大地上的歌——訪塩池県部分農民作家」（『共產党人』、共產党人雜誌社、2014年6月18日、URLは注末に記載）には、張聯の

出版詩集には「『傍晚集』『清明集』『新詩八味』、『張聯詩精選』等があり、作品は日・英語に翻訳されている」とあるが、目下のところ、第一詩集および『傍晚的詩』、『張聯詩精選』以外は確認ができない。邦訳は『藍』掲載の拙訳を指し、英訳は中国の翻訳家、楊于軍訳の『張聯詩歌訳本選読』（南方出版社、2014年）である。
http://www.nxgcdr.net/lgxd/201406/t20140618_2324438.html（閲覧日：2015年2月18日）

- 8) 注3)の孫文涛の文章に「その後彼は二人の子どもたちの進学のため、村の自宅を手放して県城に転居し、出稼ぎや小学生の補習指導のほか、本を売るなどして生計を立てているというが、暮らし向きはまだ楽ではないという」とある。半官半民の団体である中国作家協会の会員となることで給料も得ており、一定の収入がある分以前に比べ生活は上向いたかもしれないが、他の多くの底層の作家や詩人同様、経済的に豊かになったという訳ではない様子である。
- 9) 注5)の記事中で、インタビューに答えて述べている。103首から96首を選び出したが、そ

の時点までに「夕暮れ」と題する詩を何百首も作ってきたとも書かれている。

- 10) 筆者が翻訳の際に底本としたこの詩集には、198首の夕暮れの14行詩が収録されている。おそらく『傍晚集』収録の96首に、注8)で示した数百首の夕暮れの詩からさらに約100首を加え出版したものと見られるが、『傍晚的詩』には説明がなく、また『傍晚集』のほうを入手できていないため、収録内容を比較できず確認できない。
- 11) 王小妮は「詩人需要詩, 不是詩需要詩人」(『南都周刊』、2011年10月27日、URLは注末に記載)において、大学における詩歌教育実践についてのインタビューに答え、張聯を授業で取り上げる理由を述べるなかでこのように話している。
<http://www.nbweekly.com/culture/books/201110/27872.aspx>（閲覧日：2015年2月27日）
- 12) 中国では、多めの水に米を入れて茹で、炊きあがる前に重湯をすくって捨てた後、蒸しあげるようにしてご飯を炊く。